

あゝ 琳 瑞 和 上

石 橋 誠 道

言ふまでもなく福田行誠上人は、知恩院の歴代の中でも、最も光輝ある大徳ある。この行誠上人が、まだ東京の小石川傳通院に御住職の頃であつた。其の弟子の中に祥道琳瑞和上といふ麒麟兒があつた。上人はこの弟子を、立派に鍛ひあけるべく、常に努力されつゝあつたが、然し壯年に暗殺されたのは、誠に惜しいことであつた。

琳瑞和上は羽前の人、細谷與左衛門といふ資産家の子であるが、若い時に奥州無能寺の住職矢吹琳堂和上に就て出家し、才學絶倫の質であつた。其後東京傳通院に來り、行誠上人に従つて學び、傳通院の前の處靜院に住職し、學徳兼備の譽れ高く、而かも機智才能に富み、加ふるに慷慨悲歌の士であつた。

然るに時恰かも幕末世變の期に際し、國內至る處議論沸騰、いつ何時に電雷大雨が來るかも知れぬといふ實に物騒な時であつた。

機智に富んだ彼の和上は、唯だ靜かに本を讀んでばかりは居られなかつた。知らず識らずに當時の志士、關口權助、那珂通高、横田謙三郎等の如き憂國の士と交つた。和上の往來面會の人は、一日平均七十餘人であつたと言はれてゐる。

さてこの琳瑞和上が、かの有名な高橋泥舟翁と親しくなつた最初の動機に就ては、頗る面白い話がある。

高橋泥舟は、山岡鐵舟、勝海舟と與に、當時天下の三舟と謳はれ、而かも高橋と山岡は、槍術の名人天下の御指南番さて、將軍指導の任に當り、名聲藉々たるものであつた。

時は元治元年の二月、琳瑞和上は突然泥舟翁を訪問し、槍の試合を是非拜見したいと頼んだ。翁は始は馬鹿にした。この坊主何を考へて申込んだか、甚だ變だと思へたが、然し折角の申込を、無下に斷るもいかゞとて、日を期してそれを承諾した。

今やその日が到來した。泥舟は特に門人の中の、最も上手な者と呼んで準備を命じた。幾多の門人が集つた。和上も道場に列席した。いよいよ試合が始まつた。和上は一心にそれを見た。試合の最中、和上は「アツ」三といふ一言を洩した。この奇怪なる失聲は、多くの人に最も不快の感を與へた。然しながら間もなく試合は終了した。

泥舟潜かに心の内に思ふには、この坊主甚だ生意氣な野郎だ、吾々の眞劍の試合の最中、「アツ」三といふ非點は何事ぞ今から別室に彼を呼んで、若しも心に適はなかつたならば、大に鐵槌を下してやらうと。

暫くの後、翁は和上を茶室に呼んで、靜かに二人は對坐した。翁は靜かに「私の槍を見られましたか」三尋ねた。「はい難有拜見しました」。「どんなお考へでありますか。又あの槍の試合の最中、「アツ」三言はれたのは何故ですか」。

和上云く、「實に先生の槍術は、眞妙なること限なし、聞きしに勝るお手際で、恰も佛が成道して、天魔を降す勢の様でありましたが、然しながら油斷があつた。あれが試合であつたから、何事もなしに終つたが、若しも本まの敵に對する、眞劍勝負であるならば、貴方はあの時に殺されてゐた。故に思はず「アツ」三失聲したのである」三。

この一言に泥舟は、この坊主めは、實に偉いことを言ふ奴だ。本當に其はその通りだと思ひ、感心して、「それでは今から教を乞はう。何卒お示しを願ひます」三とて、すっかり態度が變つてしまつた。満面の血潮を、恐ろしい怒氣は、忽ち何處にか消へ失せた。卑下せる容子やさしき言が徐々としてそれに代つて來た。和上はその時佛敎の深義を説き、虚實の旨を詳しく述べて、縷々として盡きず、湯々として流れ、すっかり泥舟を參らせた。即ち槍術の深奥の義は、先づ佛敎を學ぶことにあるのだと結論した。その時翁は非常に感謝して、こゝに師弟の禮を取るに至つた。其後の二人の親交は

また格別なものであつた。

二人の往復は頻繁になつた。朝早くから夜おそくまで、雨、風、雪は問題ではなかつた。然しこゝに驚くべきことが起つた。

一日和上は泥舟翁を其宅に訪ひ、時世の非なることを慨き、明日水戸侯に面會して、水戸侯から添書を得て京都に上り、上奏文を上らふと思ふが、それにはさうしても、貴殿の賛成を得なくてはならない、是非共同道して呉れないか頼んだ。泥舟はそれは今尚ほ早いから、暫くその成り行を見るがよいとて、兩人互に議論を戦はし、激論時を移して遂に十二時を過ぎてしまつた。この時和上は歸途に就いたが、泥舟は歸途を危ぶんで、宿泊すべく勧められた。和上はそれを聞き入れなかつた。泥舟翁は竊かに途中の危険を恐れて、齋藤安之進を隨伴させて警戒した。

和上は翁の宅を辭し歸途小石川の三百坂を通りかゝつた時に、突然暗の中から二人の刺客が飛び出した、一人は廣井求馬といひ、一人は松岡丙九郎で、何れも有名な劍客であつた。廣井は鍛練した腕で和上の背後に、大刀を以つて切り付けた。首から肩の方にかけて可成に深く切り込んだ。和上はこの時少しも騒がず、南無阿彌陀佛と一稱して、直ちに其場に斃れてしまつた。その時廣井は打ち寄つて、和上の首級を取らんとした刹那、齋藤安之進は拔刀して、廣井の右の腕を切つた。廣井は其場で屍餅をついた。其時松岡丙九郎は、直ちに齋藤に切りかゝつた。齋藤は之に應戦した。斯様に暫く立舞はる内に、さうしたはづみか松岡は、右の耳を切られて逃走した。然しながら齋藤は、かの松岡が和上の首を取る爲に、必ず再び来ることを豫想し、杉の木立に身を潜めて、靜かにそれを待ち受けた。案の如くに松岡は忍び來つて和上の首を切らうとした。齋藤はすかさず後の方から切りつけた。松岡は痛手を受けて逃げ去つた。廣井は附近に死んでゐた。齋藤自身も血に染まり、深き痛手を受けてはゐたが、早速その事を泥舟に傳へた。松岡も宅に歸つて後間もなく絶命したといふことである。それ故これは結局誰れの使喚か全く解らずに終つてしまつた。

泥舟及び鐵舟は、それを直ちに處靜院に傳へ、その夜の内に死體を其寺に運び移した。

行誠上人はこれを見て、哀傷し給ふこと限りなく、翌日懇ろに棺に納め、厚くこれを葬られた。而して誰れの使喚に因つて、殺したのであるかは、遂に判明しなかつたが、當時一部の人々には、和上は公武合體の説を主張し、急進主義を稱へたが、泥舟翁は早尙と稱し、意見が一致せぬ所から、遂に劍客を使喚して、殺したであらふといふ噂さへ立つた。然しながら、從來兩人の關係から、まさか斯様なことはあるまい。兎も角和上は英傑であつた。國事の爲に犠牲となつた。而してその年の十二月には、王政復古の大令下り、翌年の九月改元して明治と稱し、維新の大業が成就した。嗚呼我が淨土宗にまた、斯る志士を出したことは、寔に千載の誇りである。時に和上は三十八歳であつた。

(余はこの話を、曾て摩訶衍第五卷に書いた。然しながらそれは餘り研究的で、却つて要領を得ないから、今又再びその要點を書いた)。